



絶望の淵に若者を立たせない

フランスに続き、ドイツでも米国でも銃乱射のテロ。よその国のことと思っていいたら、津久井では障害者を大量に殺傷する事件。

これでは、いくら警備を強化しても、どうにもならない。

絶望から

米国では

各事件に共通する事は、どの犯人も生きる事に絶望していること。

トランプ氏は加害者がISに傾倒していたので、イスラム教徒は入国禁止という。しかし、イスラム諸国から来た人が事件を起こした訳ではない。生まれた時から欧米で育った人もいる。入国禁止では解決できない。

この閉塞感が若者を絶望に陥れているのではないか？

なかなかに希望する職に就けない。就職できても賃金が安い。残業が当たり前で労働時間が超長い。その一方でアベノミクスで巨億の富を得る一部の富裕層。こんな社会を変えてゆかない限り、こういう犯罪をなくすことができないのではないか。

欧米では加害者は殆どその場で射殺された。日本では死刑になると思っていたのではないか。結末を犯人は気にしていない。二〇〇八年の秋葉原での殺傷事件犯は死刑を望んだ。

皆さんはどう思われますか？

立山 室堂

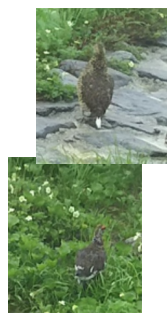
富山県中新川郡立山町室堂



梅雨明け前の立山は雲が低い。立山はおろか、遠望できるはずの富山平野も見えない。

室堂付近の雪渓はまだ大きく、雪融け水が流れ出していた。池塘があちこちに見られる。

稚児車、小梅蕙草、小岩鏡、日光黄菅、兔菊などの高山植物があちこちに。都会の庭園とは違い、どれも小さく可憐。こういう花にこそ心が惹かれる。



歩いていたら、目の前に雷鳥のつがいが見られた。人を恐れることもなくゆっくり歩く。

弥陀ヶ原の国民宿舎天望立山荘など、各山荘では、富山県ナチュラリスト(自然解説員)の方から立山の高山植物について色々教えていただける。